NAD Monthly Report.

Market Flash

進化するAIの世界　No1
～GPTの進化・最新のAIアプリ～

2025.11

日本アルプス電子株式会社
NIHON ALPS ELECTRONICS CO.,LTD.

Market Flash

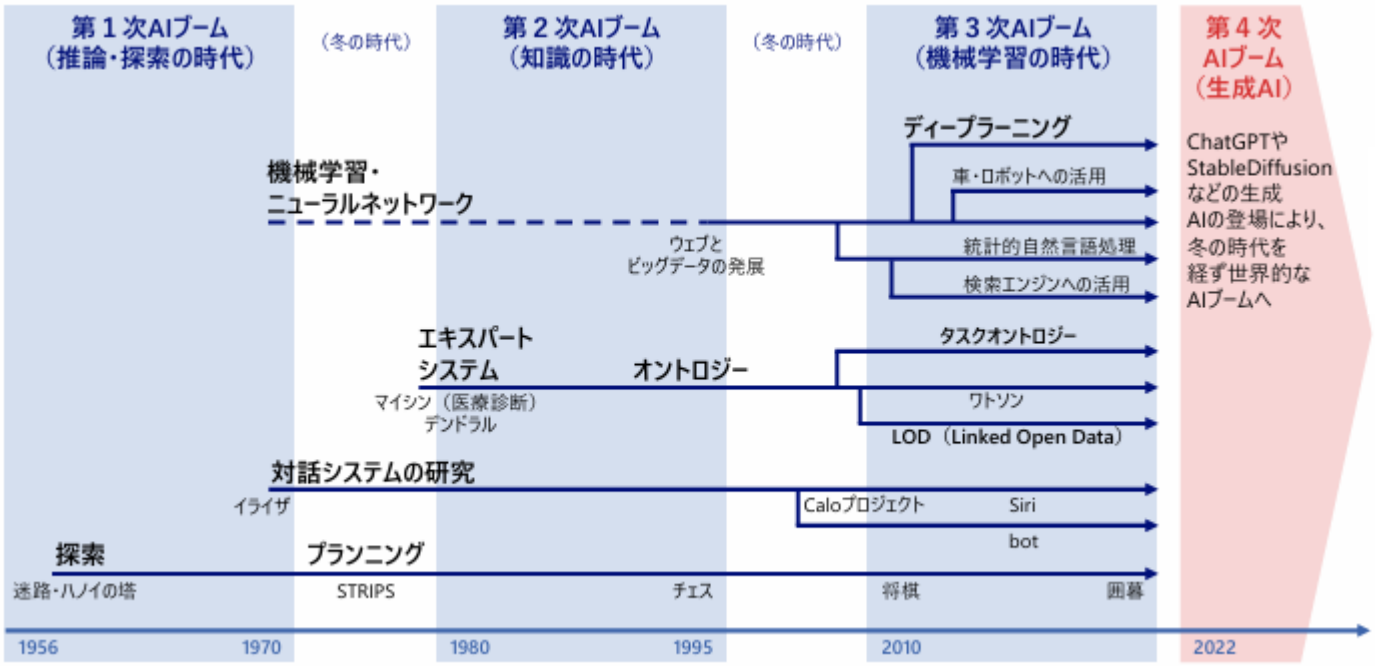
2025.11

～進化するAIの世界～

2023年3月に「対話型AIの進化　～ChatGPTの威力とリスク～」というテーマでレポートを作成しました。それを読み返すとまだまだ開発中で不完全さはあるがChatGPTのすごさに驚いていたことを昔のように感じた。それから2年半、生成AIの進化は予想以上に進み全世界に広がりを見せている。ITの世界でいわれる「集積回路上のトランジスタの数が18カ月ごとに2倍になる」というムーアの法則は既に終わったと思わせる進化である。

今月から数回にわたって「進化するAIの世界」をテーマに、生成AIの現状、AIとビジネスの関係、AIの未来（AGI、ASIなど）についてまとめてみたい。

まず初めにAI普及の歴史を振り返っておこう



1950年-1960年：AIの出現

•アラン・チューリングによるAI（人工知能）の概念創造

•ジョン・マッカーシーが思考する機械を「人工知能」と命名

•AI（人工知能）」の存在が世界中の科学者へ知られる

1950年：AI（人工知能）の概念が誕生

AI（人工知能）という概念の起源となったのは、イギリス出身の数学者である「アラン・チューリング」が執筆した論文『計算する機械と知性』である。

そして、チューリング氏は「機械が思考したかどうかは、人との会話が成立したかどうかで判断する」としたうえで、このテストのことを「チューリングテスト」と名付けた。

1956年頃：「人工知能」という言葉が生まれる

1956年、科学者たちによって開催されたダートマス会議において、アメリカのダートマス大学の数学教授であったジョン・マッカーシー氏が、人間のように考える機械のことを「人工知能」と名付けた。

チューリングによる人工知能の概念を確立するとともに、ダートマス会議においてマッカーシー氏が「人工知能」という言葉を定義したことをきっかけに、AI（人工知能）は世界中の科学者たちに認知されるようになった。

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

1960年-1974年：第1次AI（人工知能）ブーム～推論と探索～

1960年代：第1次AIブーム勃興

「第1次AIブーム」は、1960年代にアメリカやイギリスで勃興したといわれている。

この頃は、1964年にIBMが後世のコンピューターにも影響を与えた「システム360」というモデルを発売するなど、コンピューターの黎明期でもあった。世の中に普及し始めたコンピューターを使ってAIの開発・研究ができることもあり、推論（人間が思考する過程を記号で表現し、実行していく）と探索（目的となる条件を、解き方のパターンを場合分けして探し出していく）という方法で多くの問題の解決策を見つける技術研究が進んだ。

この技術によって、人間では時間がかかってしまうようなパターン分けの作業も、よりスピーディーに行えるようになりた。囲碁や将棋、チェスといったボードゲームに用いられているAIには、この探索技術が用いられている。

1966年：Siriの起源となったAI・人工知能「イライザ(ELIZA)」が開発される

そんな第1次AIブームではさまざまな研究が進められたが、数多く存在する研究の中でも、1966年にマサチューセッツ工科大学のジョセフ・ワイゼンバウム氏によって開発された「イライザ(ELIZA)」という世界初の自然言語処理プログラムは、特に大きな注目を集めた。

イライザは、文章を用いて自然言語（人間の言語）を処理して、あたかも人と対話しているように回答を提示できるプログラムである。仕組みは、特定のキーワードに反応する回答パターンを複数用意しておき、入力した文章に含まれるキーワードに応じて、定型文で応答するというものであった。

イライザは、現在iPhoneやiPadなどのApple製品に導入されているAIアシスタント「Siri」の起源になったプログラムともいわれている。

1974年-1980年：冬の時代

- 複雑な要因を含んだ問題はAIに解けないことが判明
- AIの性能が科学者間で疑問視される
- 研究支援が滞りブームが下火化

第1次AIブームでは、多くの人々からAIに期待が寄せられた。しかし、当時のAIの技術は決して高くはなかったため、1974年から1980年代初頭までの期間は、のちに「冬の時代」と呼ばれるようになった。

この時代のAIはたとえば、迷路の解き方や定理の証明といった単純な仮説には対応できても、現実の社会で問題となるような、複数の要因が絡み合う課題を解くことはできなかったのである。

このように、AIの性能的な限界が見えたことにより、初めてのAIブームは下火化。研究支援も滞った結果、AIの開発は失速してしまうのである。

1980年-1987年：第2次AIブーム（知識を蓄積したエキスパートシステム）

- エキスパートシステムが事業に広く導入され始める
- Cyc（サイク）プロジェクトが注目を集める
- ディープラーニングの基本となる「誤差逆伝播法」が発表

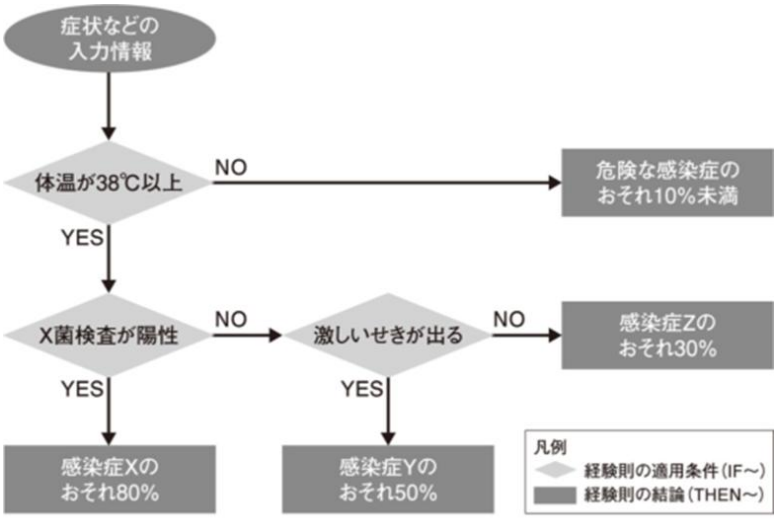
1980年-1987年：多数のエキスパートシステムが実現

人々からAIへの関心が薄れた冬の時代を経て、再びAIへの関心が高まる時期がやってくる。それが「第2次AIブーム」と呼ばれた1980年～1987年頃。多数のエキスパートシステムが実現されたことによって、再度AIブームが起こった。

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

～進化するAIの世界～

エキスパートシステムとは、プログラムが特定の問題に対して専門家のように推論を展開し、問題解決へ導くシステムのことである。その仕組みは、入力された情報に対し、システムが専門家の意志決定プロセスを模倣して回答を出力するというものである。
たとえば、以下の例では、「体温が38℃以上」「X菌検査が陽性」などの選択肢にYES/NOのどちらかで回答することで、感染症に罹患している確率を把握できるようになっている。このように、エキスパートシステムを活用すれば、実際に専門家から対面でアドバイスをもらわずとも、専門家と同程度の回答を得ることが可能となる。



Mycinを参考に、知識ベースを利用した推論結果を簡略化して作成した実際のエキスパートシステムでは、競合する経験則の扱いなど、上記より複雑な処理を経て結果を出力する

そして第2次AIブームの頃には、さまざまな大企業が積極的にエキスパートシステムを業務に導入し始め、実用的なツールとして多くの企業に商用利用されるようになったのである。
そんなエキスパートシステムであるが、この仕組み自体は現在でもさまざまな企業に導入されている。例えば、以下のような身近なサービスでも活用されている。
•Amazonや楽天市場などECサイトにおける商品のレコメンド機能
•Googleユーザーの関心に合わせた記事を表示する機能
•SNSのチャットボット（自動的に会話できるプログラム）

1984年：注目を集めたプロジェクト・アルゴリズム

第2次AIブームではエキスパートシステムとともに「Cyc（サイク）プロジェクト」にも大きな注目が集まった。Cycプロジェクトは、1984年に開始された知識記述のプロジェクトである。
一般常識をデータベース化していき、人間と同じレベルの推論システムを構築していくことを目的としたものとなっている。このプロジェクトが開始されたことで、人間の常識に根ざした推論を行うことが可能になった。

1986年：誤差逆伝播法が発表される

さらに1986年には誤差逆伝播法が発表されたことも、大きな注目を集めた。誤差逆伝播法とは、「バックプロパゲーション」とも呼ばれているもので、機械学習においてニューラルネットワークを学習させる際に使用されるアルゴリズムのことである。このアルゴリズムが、現在多くのAIに活用されているディープラーニングの基本となった。

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

1987年-1993年：冬の時代（知識獲得のボトルネック）

1980年から1987年にかけて2度目のAIブームが到来した一方、研究を続ける科学者の間では「エキスパートシステムにも限界があるのではないか」という大きな問題が次第に明らかになってきた。

というのも、エキスパートシステムには以下のような2つの大きな欠点が存在していたからである。

•手動でコンピューターに記述する手間が大きい

•例外処理や矛盾したルールへの対応が難しかった

1980年代のコンピューターシステムは、情報を自動で収集・蓄積する能力が欠如しており、エキスパートシステムに知識を入力する作業は手作業で非常に労力がかかった。ユーザーは「ユーザーインターフェースモジュール」を通じて、キーボードでデータを一つ一つ入力する必要があったのである。このような状況は、継続的な作業を困難にしていった。

また、例外処理や矛盾したルールへの対応も当時のテクノロジーでは難しく、エキスパートシステムの実用化には限界があった。

日本では、これらの課題を克服するべく1982年に「5Gプロジェクト（第五世代コンピュータ・プロジェクト）」という約540億円規模の国家プロジェクトが始まった。このプロジェクトは当時の日本の通産省が推進したもので、AIや国産コンピューターの発展を目指していたが、膨大な知識の手動記述とその管理の困難さから、1992年に終了している。

このプロジェクトは、コンピューターシステムの限界と、それを克服するための新しいアプローチが必要であることを浮き彫りにした。

1993年-2022年：第3次AIブーム（機械学習とディープラーニング）

1993年頃：3度目のAIブームの幕開け

知識獲得というボトルネックによってAI研究における冬の時代が到来したのち、1993年頃からは3度目のAIブームが訪れる。

冬の時代が明けるきっかけとなったのは1993年。この頃から、ディープラーニングが登場する2006年頃までは、「第3次AIブームへの土台が少しずつ構築された時期」といえる。

1997年：AIがチェス王者に勝利する

特に、1997年にチェス専用のコンピューターである「ディープブルー」がチェスの世界王者に勝利したことは、大きな注目を集めた。この出来事は、「初めてAIが人間に勝利した瞬間」として、現在もなお多くの人々の記憶に残っている。

この第3次AIブームの原動力ともいえる技術革新としては、以下の3つが挙げられます。

•技術革新①：機械学習の実用化

•技術革新②：ビッグデータ

•技術革新③：ディープラーニング

2022年～　第4次AIブーム

そして今私たちがいる世界では第4次AIブームの真っただ中といえる

第4次AIブームとは2022年頃の生成AI「ChatGPT」の登場に端を発し、その後のAIの社会実装が進んだ現在の状況を指す。このブームの特徴は、人間の知的活動をも代替しうる生成AIの技術革新と、それによるビジネス・社会のあらゆる分野への応用が進んでいる点である。そしてその技術開発スピード及びAIの能力これまでのブームにおけるそれとはくらべものにはならないほど進化しているのである。

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

～進化するAIの世界～

第4次AIブームの火付け役は今やだれもが知ることになったChatGPTである。その進化の過程も見ていこう。ここで2023年3月のレポートの一部をここで抜粋する。

ChatGPTはまだまだその内容については正確ではないのも事実である。AIのような専門知識についてはかなりの文献もあることからかなり正確に作成されているが、もっと単純にニッチな質問をするとすべて間違っていることもある。
例えば、「北杜市の観光名所を教えて？」と質問すると次のような回答があった。

北杜市は、山梨県の中央部に位置する自然豊かな地域で、四季折々の美しい景色や観光スポットがあります。以下は、北杜市の見所の一部です。

1. 甲州市川温泉郷：北杜市内には数多くの温泉がありますが、その中でも人気が高いのが甲州市川温泉郷です。温泉街には、様々な種類の温泉や足湯、日帰り温泉施設があり、リラックスできます。

2. 長泉寺：北杜市内にある真言宗豊山派の寺院で、重要文化財に指定されています。本堂や五重塔、庭園など、美しい建物や景色が見られます。

3. 大泉洋一美術館：北杜市出身の画家、大泉洋一の作品が展示されています。美しい自然に囲まれた建物内には、大小の展示室や美術館ショップがあります。

4. 北杜市芸術文化ホール：音楽や演劇、映画など、様々な文化イベントが開催されています。大ホールや小ホール、ギャラリーがあり、多目的に使用されています。

5. 天空の城「飯盛山城跡」：飯盛山の山頂にある城跡で、徳川家康の家臣であった加藤清正が築城しました。360度のパノラマビューを楽しめます。

その他、北杜市は自然が豊富な地域なので、山登りやハイキング、スキーやスノボなど、アウトドアスポーツを楽しむこともできます。また、地元の農産物や特産品を使ったグルメも人気があります。

上記の各観光名所はすべて北杜市にはない！という驚きの結果であった。

同じ質問を今のGPTに投げかけてみると次のページにある名所を紹介してきた。いずれも写真付きであった（写真は省略）さらに、「もしよければ、「温泉地」「夜景スポット」「家族連れ向け」など、目的別にさらに5～10箇所ご紹介できますが、どうしますか？」と聞いてくる。まさに対話型のAIである。

2023年時点ではネットの検索も2021年までのものしか学習していなかったが、今のChatGPTは当時GPT-3の10倍以上の学習能力を身に着けている。

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

山梨県北杜市には自然、アート、温泉、名水など多彩な魅力が詰まっています。いくつかおすすめの観光名所を紹介します。

---

① 清里高原（きよさとこうげん）
南麓の高原リゾートエリアで、澄んだ空気と草原、八ヶ岳を望む景色が魅力です。るるぶトラベル+1
•牧場やカフェ、軽いハイキングコースもあり、季節を問わず楽しめます。
•観光定番スポットなので、週末・祝日は駐車場や宿が混みやすいです。早めの出発や予約をおすすめします
•アクセス：中央自動車道「小淵沢IC」から車で約10～20分。

---

② 瑞牆山（みずがきやま）
標高2,223 mを超える山で、岩壁や深い森、四季折々の自然が楽しめる人気の登山・ハイキングスポットです。Yahoo!トラベル+1
•初心者～中級者向けの登山ルートがあり、登山装備や天候チェックは必須です。
•山頂からの眺望が素晴らしく、早朝や晴天日の訪問が特におすすめ。
•登山後は近隣の温泉で疲れを癒すのも良い流れです。

---

③ 白州・尾白川名水公園 べるが
水源の里として有名な白州町にある複合施設で、名水遊び・キャンプ・温泉などが一体になったスポットです。トラベルウェブマガジン旅色+1
•清流での川遊びやバーベキュー、宿泊施設もあり、ファミリー・グループ旅行にぴったり。
•名水「尾白川」の水汲み場も近くにあり、ペットボトル持参で名水を持ち帰るのも人気。
•夏場はとくに冷涼で気持ち良く、混雑を避けるなら午前中の到着がおすすめです。

---

④ 山高神代桜（やまたかじんだいざくら）

日本でも有数の樹齢を誇る桜の名木。春に訪れると圧巻の景色が広がります。子供とおでかけ情報サイト いこーよ
•桜の季節（4月中旬～下旬）に訪問するのがベスト。近隣で混雑するため余裕をもったスケジュールを。
•現地にはトイレ・駐車場はありますが周囲が狭めなので、公共交通＋徒歩も検討すると良いでしょう。

---

⑤ 中村キース・ヘリング美術館
アメリカのポップアート界を代表する Keith Haring の作品を中心に展示するユニークな美術館で、自然豊かな北杜市の中でアートを楽しめます。るるぶトラベル
•屋内展示なので天候を気にせず訪問可能。雨の日の観光にも適しています。
•近隣にカフェもあるため、ゆったりと滞在するのもおすすめ。

もしよければ、「温泉地」「夜景スポット」「家族連れ向け」など、目的別にさらに5～10箇所ご紹介できますが、どうしますか？

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

～進化するAIの世界～

＜ChatGPTの進化＞

1. 2022年末：最初の ChatGPT（GPT-3.5 時代）ChatGPT 無料リサーチプレビューとして公開
2. 2023年前半：GPT-4 搭載 ChatGPT（Plus登場）
3. 2023年後半：GPT-4 Turbo とエコシステム化の始まり、カスタム GPT（後の GPTs / GPT Store）の方向性が示される
4. 2024年：GPT-4o（オムニ）で “音声・画像・リアルタイム” へ
5. 2025年：GPT-4.1、GPT-5.x、そして「アプリプラットフォーム」としての ChatGPT

3つの観点で見た「進化の傾向」

① 能力：テキストから「マルチモーダル・エージェント」へ

•2022：指示に従ってテキストを生成する「おしゃべり＋作文AI」
•2023：高度な推論・コーディング・長文処理（GPT-4）
•2024：音声・画像・リアルタイム対話（GPT-4o）
•2025：長大コンテキスト・エージェント機能・アプリ実行（GPT-4.1 / 5.x）

現在のGPT５の能力の特徴（公表・報道ベース）：

oo推論の一貫性・安全性向上（メンタルヘルス文脈での安全対応など）
oエージェント的な振る舞い（複数ステップの計画・実行）の精度向上
oマルチモーダル（テキスト＋音声＋画像）を前提とした設計

② 学習データ量・範囲：

•GPT-3 時点で 3000億トークン級 のテキストデータ（Web＋書籍＋Wikipedia＋コード）
•以降の GPT-3.5 / 4 / 4o / 4.1 / 5.x は正確なトークン数は非公開

ただし傾向として

・データ量：数千億 → 兆トークン級 へスケール
・種類：テキスト＋コードに加え、画像・音声などマルチモーダル、より多言語
・品質：RLHF や安全性のための人間フィードバックデータが増加

③ 利用者数：

利用者数の推移（大まかなマイルストーン）

•2023年1月：月間1億ユーザー（2か月で到達）
•2023年11月：週1億アクティブユーザー（DevDay で公式発表）
•2024年8月：週2億ユーザー超（Reuters）
•2025年7月：月間7億ユーザー（世界の成人の約10%）という研究報告
•2025年10月：週8億ユーザー超と Altman が発表（DevDay 2025頃）

→ わずか約3年で、「ニッチなAIツール」 → 「世界人口のかなりの割合が使うインフラ級サービス」 へ拡大したことになります。

個人利用（情報検索・作文・学習）だけでなく、

o92%の Fortune 500 企業が API / ChatGPT を利用
o教育・プログラミング・資料作成・顧客対応・検索など、多様な業務プロセスに組み込まれている

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

～厳選AIアプリ～

このGPTの進化に伴って競争が激化し、今では様々なAIアプリが開発され利用されている。そのいくつかをご紹介する。

1．ChatGPT

まずはおなじみのGPTである。各段に性能が上がったGPTは、今や若者の相談相手にもなっている。
ビジネスの世界でも日常的に使われるようになって、現在の利用者は約8億人／週である。英文の契約書の日本語訳からその契約書について契約者に不利な点がないかの分析までこなす。
普段使用してみて気づいたことは、質問に対して回答があると同時に、質問の主旨を踏まえて、「更にこのようなことに応えられます」という逆質問がある点が素晴らしい。自身が考えつかなかった視点で深堀してくれ、情報や知識をより深いものにしてくれる。
ただし、出てきた回答をレポ―ト形式でまとめパワーポイントを作成することは苦手のようだ。レポート作成やスライド作成には向いていない

用途	有効性
1.　文書作成・リライト・要約 •メール文／お知らせ文／稟議書のたたき台作成 •会議メモからの議事録作成 •長文資料の要約（経営向けサマリーなど）	•「ゼロから書く」より、「GPTにたたき台を書かせて整える」ほうが圧倒的に早い •文体（丁寧／カジュアル／経営者向け、など）を指定できるので、品質が一定しやすい •要点だけの整理や、長文の3行サマリーなども得意で、「読む時間」も削減できる
2. 調査・情報整理の伴走役 •新しい技術や業界トレンドの概要をつかむ •法律や規制、専門用語の「まずはざっくり理解」 •いくつかの論点を並べて「整理して比較してもらう」	•ググるとバラバラに出てくる情報を、「①背景 ②メリット ③リスク」のように整理してくれる •専門用語も「中学生にも分かるように」といったレベル調整ができる •自分の仮説を投げて「抜けている視点は？」と聞くことで、思考の漏れチェックに使える
3. Excel・プログラミングなどの業務自動化支援 •Excelの関数やVBAマクロの作成・修正 •定型レポート作成を自動化するスクリプトの作成 •既存コードのバグ原因の説明、リファクタリング案	「やりたいこと（日本語）」→「関数／コード」に変換するのが得意 •エラー内容を貼り付けて「なぜダメか？」を説明させられるので、学習にもなる •コードのコメント付けやリファクタ案も出せるので、「属人化の解消」にも役立つ
4. 企画・アイデア出し・構成案づくり •新サービス・新規事業のアイデア洗い出し •セミナー資料や提案書の「目次・ストーリー案」作り •キャッチコピー案、タイトル案の大量生成	•「とりあえず30案出して」といった量のアイデア出しが瞬時にできる •ターゲット（経営者向け／現場向け／若手社員向け…）を指定して、それぞれの視点の案を出せる •まだ考えが固まっていない段階でも、「こういう切り口もある」と発想を広げてくれる
5. 学習・トレーニング・質問対応 •新人・異動者が、業務で分からない用語や概念をその場で質問 •「この資料のポイントを教えて」「過去の会議の内容をかみ砕いて説明して」 •英語資料や海外ニュースの要点理解・簡易翻訳	•1対1の“パーソナル家庭教師”的に使えるので、学習のハードルが下がる •「ここまでは分かっているが、この先が分からない」という途中からの質問も受け止めてくれる •英語⇔日本語の橋渡しができるので、海外ドキュメントの活用度が上がる

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

2．Gemini

「Googleの世界（Gmail／Docs／Drive／Maps など）」を日常的に使っている人・会社ほど、Geminiは相性がいいアプリ。メールやスケジュール、マップを連携させて業務効率を上げることができるようになっている。その点、GPTとは使い方が異なると思う

用途	有効性
1. Gmail・Docs・Slides など日常業務の生産性アップ •Gmailで長いメールスレッドを要約してもらう／返信案を作ってもらう •Docsで企画書・稟議書・議事録のドラフト生成 •Slidesでプレゼンのアウトラインや原稿を作成 •Meetで会議ノートや要点の自動整理	•Gemini は Gmail・Docs・Sheets・Slides・Meet にネイティブ統合されていて、画面右側のサイドパネルからそのまま文章生成や要約ができる。 •「◯◯向けに丁寧なトーンで」「3つの論点に整理して」など、ビジネスに合わせた指示がしやすい •メール・資料・スライドがすべて同じ Google Workspace 上にあるので、「別ツールにコピペする手間」がほぼなく、日々の細かい“知的作業の時間”をかなり削れまる
2. Deep Research を使ったリサーチ・レポート作成 •市場調査や競合調査の“たたき台レポート”作成 •社内の過去資料（Docs／Slides）＋ウェブ情報をまとめたブリーフィングメモ •長いメール・チャット・資料をまとめて「経営向け1枚サマリー」にする	•Gemini Deep Research は、ウェブだけでなく Gmail・Drive・Chat などの Workspace の中身もまたいで情報を集めて、レポートを生成できるようになった。 •「関連しそうな社内資料を探してきて要点をまとめる」という、ホワイトカラーが一番時間を取られる作業をかなり自動化できる。 •ステップごとのリサーチプランを立ててくれるので、“考え方”の抜け漏れチェックにも使える
3. 社内データとつながる「AIコパイロット」（業務アシスタント） •「この案件の過去見積もりと類似案件の条件を一覧にして」と指示して、Drive＋Sheets＋Gmail から情報を引いてまとめさせる •Salesforce や SAP、BigQuery などと連携して、営業・経理・工場の KPI やトレンドを自然文で問いかけて確認 •FAQ ボット／社内ヘルプデスク的な使い方（社内規程・マニュアルを読ませる）	•Gemini Enterprise は、Google Workspace だけでなく Microsoft 365 や Salesforce・SAP・BigQuery など外部業務システムとも連携し、会社データに基づく「業務エージェント」を動かせる設計になっている。 •「どこに何のデータがあるか」を社員が覚えていなくても、Gemini に質問するだけで必要な情報に辿りつけるようになるため、オンボーディングや属人性の軽減に有効。 •権限やセキュリティは Google Cloud 側の仕組みの中で制御できるので、“勝手に外部に出てしまう”リスクを抑えながら社内活用がしやすい
4. 開発者向け：AI Studio＋Gemini API でアプリ／ボット開発 •社内ポータルやチャットツールに組み込む、QA ボットや業務フロー補助ボットを開発 •画像・音声・動画を含むマルチモーダルアプリ（問い合わせ自動分類、画像からの棚卸しなど）	•Google AI Studio から Gemini ファミリーのモデルを試し、そのまま API コードを生成してアプリに組み込める。 •最近は「Gemini Live」や画像編集・動画生成（Veo 系）など、対話・画像・動画をまとめて扱えるツール群も拡充
5. モバイル＆Google Maps 連携での“現場・移動中アシスタント” •外出先で、Gemini アプリに「この商談のポイントを3つで教えて」と聞き、関連メール・カレンダー・資料から要点だけ把握 •Google Maps との連携で、営業ルート上にある顧客・候補店舗・スポットを会話しながら検索	•Gemini アプリは、メール・カレンダー・ドキュメントや外部サービスと連携できる拡張機能（Gemini apps／extensions）を持ち、スマホからでもかなり“仕事に直結した問い合わせ”が可能 •Google Maps との統合が進んでおり、**「ナビ＋会話型の行き先相談」ができる“移動中のAIコパイロット”**として利用できる

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

3．Claude

Claude は 「長文に強い」「論理性が高い」「文章表現が自然で読みやすい」 という特徴があるため、
他のAIと比べても “文章品質が重要な仕事” に非常に向いている のが大きな強み
検索機能だけではなくそこから考察される項目建てを作成してまとめてくれる。例えば、「〇〇市場の情報を集めたい」と聞くだけで、市場動向、地域別動向、セグメントごとの動向、地政学リスクと分けてレポート形式でも提供してくれる優れもの。
長文の論文や契約書なども精密に分析してくれる。

用途	有効性
1. 高度な文章作成・リライト・要約（長文特化） •ホワイトペーパー、レポート、企画書、学術的な説明 •社長メッセージ・理念文・ストーリーテリング •100頁以上の PDF を要約・構造化 •誤解が生まれやすい文章の「上品な言い回しへのリライト」	•Claude は 長文読解力がトップクラス で、論理構造を壊さずに整理・要約できる •文章の「自然さ」「読みやすさ」が非常に高く、ビジネス文書品質が安定 •大量の情報を一度に読み込めるため、資料の通読→要点抽出の時間を大幅削減 →「文章で勝負する仕事（経営、企画、法務、広報）」ほど Claude は強い。
2. 戦略立案・思考整理・論点出し（ロジカル思考に強い） •戦略の論点整理 •経営課題の分解、MECE 分析 •新規事業アイデアの評価 •会議前の論点ブレスト	•Claude の特徴は “論理の一貫性が高い” こと •思考の抜け漏れを補い、仮説の整理を手伝うのが得意 •「こう考えると矛盾がある」「この前提は弱い」などの“批判的視点”もくれる →経営層・コンサル・新規事業担当との相性が特に良い
3. 読解力を活かした契約書・規程・技術文書の解析 •契約書のリスク・不利条項の指摘 •社内規程の矛盾点チェック •技術文書（仕様書・取説）の要点整理 •条文の比較（旧版 vs 改定版）	•法律文書のような “長く複雑・前後参照が多い文書” の解析が非常に得意 •一文ごとの意味、隠れたリスク・解釈のゆらぎまで指摘してくれる •変更点比較などの精度が高く、**「人が気づきにくい差分」**を発見できる →法務・総務・技術部門での利用効果が大きい。
4. 創造的な文章生成（ストーリー・コピー・ネーミング） •キャッチコピー、ブランドストーリー •ストーリー仕立ての提案書 •プレゼン資料のストーリーライン作成 •社内向けメッセージの表現改善	•Claude は「人間っぽい、温かみある文章」を生みやすい •ストーリーを伴う文章（ナラティブ）がとても自然 •“丁寧・上品・知的な文章” の生成が得意で、企業文書に向く →経営メッセージ、広報、営業資料で特に力を発揮。
5. 知的パートナーとしての対話（深める・広げるに強い） •ディスカッション相手として仮説検証 •文章の論調・倫理観のアドバイス •輪読・ブックレビュー・思索の深化 •社内教育のティーチングアシスタント	•Claude は対話が「落ち着いていて深い」 •物事の「背景」「思想」「原理」を丁寧に説明できる •自分の意見に対して、優しく constructive に反論してくれる →“対話しながら考える仕事”に最強の伴走者。

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

4．Genspark

「スライドを早く作りたい」「データを可視化したい」「アイデアを素早く形にしたい」「短い時間で調査を済ませたい」「移動中や隙間時間にも業務を進めたい」ー こういった “スピード／隙間時間／形を出す” というニーズが強い場合、Genspark は非常に有効。
例えば、GPTやClaudeで作成したレポート形式を添付してそれをスライド形式にするよう指示すると、グラフや図を使用してより見やすいプレゼン用のスライドを作成してくれる。
ただ、表示形式が不安定でそのままでは使用できない場合もあるが、スライド作成などの視覚化のアイデアを引き出すには有効である。

用途	有効性
1. プレゼン資料・スライド作成の高速化 •会議用プレゼン資料を数十枚作る際、Word／Excel／PDFをインポートして「このデータから10枚のスライド作って」と指示 •企画書や営業提案用のスライドのたたき台を数分で生成	•Genspark は “AI Slides” 機能として、文書・スプレッドシート・PDF を取り込んでスライド化できる設計になっている。 •通常、スライド作成には構成検討・レイアウト・ビジュアル挿入などで時間がかかるところ、AIが構成を提案・レイアウトも生成することで大幅な時間短縮が期待できる。 •「構成→編集」の流れが速くなるため、企画段階の“案出し・ブラッシュアップ”をスピーディに行える。
2. データ解析・レポート・グラフ・シート生成 •ExcelやCSVデータを「このデータからトレンドをグラフ化して」「見えてる要点を3つ教えて」と指示 •定型レポートを自動化して、毎月・毎週のレポート作成時間を削減	•Genspark “AI Sheets” 機能として、「複雑なデータを自然言語で質問」「ビジュアライズ・レポート生成」が可能とされている •宣言的な指示（例：「売上データから地域別トレンドと前年同期比を出して」）だけで、数式を自分で組む必要が少ないため、Excelに習熟していない人でも高度なレポートが作りやすい。 •レポート作成にかかる“雑務”を減らし、分析や意思決定に使える時間を増やせるという意味で有効。
3. 企画・アイデア出し／マルチメディア生成（画像・動画・音声） •新商品・サービスの企画段階で、「5つの斬新なコンセプト案を出して」→さらに「それぞれの案をイメージ画像化して」 •社内／社外向けプロモーション動画を簡易に生成（アイディア＋簡易素材） •音声・音楽素材も含めた“マルチメディア案”をAIに提案してもらう	•Genspark は「映像・画像・音声をシンプルなプロンプトで生成できる」点が特徴として挙げられている。 •企画段階では「アイデアをビジュアルで描く」「プロトタイプ感を出す」ことが重要ですが、AI生成があればラフでも早く形にでき、検討サイクルを短縮できる。 •結果として、アイデアの評価・修正・繰り返しが高速化され、企画力・クリエイティビティへの投資が高まる。

例えば、ここで紹介したGPT、Gemini、Claudeの比較に知いてのスライド作成を依頼すると次ページのような非常に見やすく整理してくれる

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

Market Flash

2025.11

～厳選AIアプリ～

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

5． Adobe Firefly 🔥

Adobe Firefly（アドビ ファイアフライ）は、アドビが開発・提供しているクリエイティブに特化した生成AIモデル。
最大の特徴は、学習データとして著作権所有者から許可を得たAdobe Stockのコンテンツ、パブリックドメイン（著作権切れ）のコンテンツ、およびオープンライセンスのコンテンツのみを使用している点である。
これにより、著作権侵害のリスクを大幅に軽減し、生成されたコンテンツを安心して商用利用できる設計になっている。（ただし、ベータ版機能など、一部制限がある場合がありますので、利用規約の確認は必要）
機能的には画像生成と画像編集の分野で、クリエイターやビジネスユーザーにとって非常に大きなメリットをもたらすという特徴を持っている。

用途	有効性
1. クリエイティブ素材の「迅速な生成／量産」 •新製品プロモーション用のビジュアル（背景・キャラクター・シーン）をテキストプロンプトから生成 •SNS投稿・バナー広告・ウェブサイト用画像をテンプレート化・量産 •写真素材の構図変更／背景除去／色調変更をAI 補助で行い、既存素材を短時間で流用	•Firefly はテキストから画像を生成する「text-to-image」機能を持つ •また、画像の一部を塗りつぶして「何を入れたいか」を指示すると自動で生成・補完できる「Generative Fill／Expand」などの機能もある •これにより、従来デザイナーが数時間～数日かけていた「アイデア出し→素材作成」工程が大幅に短縮できます。 •特に企画段階・キャンペーン初期段階で「複数案すぐ出したい」「トーン違いを試したい」といったニーズに強く、スピードと量産力が向上する
2. ブランド一貫性・ビジュアルアイデンティティの確保 •ブランドガイドラインに沿ったスタイル（色・フォント・デザインモチーフ）で画像やアイコンを生成 •マーケティング資料・社内資料にあわせて図版・パターン・背景を統一的に生成 •キャンペーンやイベントごとに “ブランド世界観” を素早くビジュアル化	•Firefly は “商用利用が安全なデータセット（Adobe Stock／パブリックライセンス）でトレーニングされている” と謳われており、企業での安心利用が可能というメリットがある •ブランドスタイルをあらかじめ「スタイルキット」的に定義・保存できる機能も報じられており、生成時にそのスタイルを反映できる •結果として、部門横断で「この資料、なんとなくデザインがバラバラ」という状況を減らし、ブランド統一性を保ちながら制作速度を上げることができる
3. 写真／画像の編集・補正・拡張（既存素材活用） •写真の背景を差し替え、不要なオブジェクトを除去または追加する •既存画像を広げて構図を変更したり、新しい要素を補完して“別のシーン”に変化させる •Web掲載や資料用に、低解像度の画像を AI で拡大・画質改善して使う	•Firefly の “Generative Fill／Expand” 機能では、選択した範囲に対して AI による “何を入れたいか” を指示でき、自然な色・影・照明を維持しながら画像を自動補完できる •既存素材を最大限活用できるため、素材費用・撮影回数・素材準備時間を低減可能 •特に写真撮影コストが高い製造／不動産／建設／リテールなどの分野では、“少ない撮影で複数シーン展開する”ための手段として有効

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

～厳選AIアプリ～

6． Gamma

Gamma（ガンマ）は、AI技術を活用してプレゼンテーション資料、ドキュメント、簡易的なウェブサイトなどを自動で作成・編集できるツールです。特に、資料作成にかかる時間と労力を大幅に削減できる点が最大の魅力

“AIで資料を瞬時に作る”ことに特化したプレゼン／ドキュメント生成ツール。

PowerPointでもNotionでもなく、資料作成の完全自動化を狙った新世代ツールという位置づけ

用途	有効性
1. プレゼン資料（スライド）の高速生成・リライト •会議・経営説明・営業提案のスライドを「文章から自動生成」 •既存のWord／PDF／ブログ記事をコピペ→そのままスライド化 •テキストだけ準備しておき、Gamma に「10枚のプレゼンにして」と指示	•Gamma は「文章 → スライド化」の変換が極めて強く、数分で質の高い資料が完成する •レイアウトが統一的でデザイン性が高く、手作業で整える必要がほぼない •“修正もAIに指示するだけ”で、構成・デザイン・文章を自動再調整できる ➡ 社内で最も手間のかかる“資料づくり”全体を効率化できる
2. 営業用提案書・顧客向け説明資料のテンプレート化	•Gamma は資料デザインが洗練されており、**「テンプレート化 → 構成の焼き直し」**に向いている
3. 研修資料・マニュアル・社内ドキュメントの効率的な作成	•社内オンボーディング資料、業務手順書、研修用スライド

Gensparkのスライドと比べるとより視覚的なスライドになっている

Gensparkはどちらかというとペーパーで配布する場合、Gammaはスクリーンにスライドを映すのに向いているようである

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。

7． Perplexity

従来の検索エンジンが検索結果のリンクを並べるのに対し、Perplexityは複数の信頼できる情報源から情報を収集し、それを生成AIが統合・要約して、包括的かつ読みやすい単一の回答として提示する。
回答の各部分に使用されたウェブサイトや文書のリンクを明確に引用として提示してくれるので、他のAIアプリで検索した結果が正しく検索されているかどうかを判定することにも利用できる。各種数字の正確さを検証するのに便利である。根拠が必要なリサーチはこのPerplexity！

用途	有効性
1. 最新情報・ニュース・一次情報の高速リサーチ •市場・業界の最新ニュース把握 •新技術・法改正・海外動向の情報収集 •競合企業の最近の動き、採用動向、決算のハイライト取得 •急ぎの調査メモづくり	•Perplexity は Web検索結果を引用付きで提示するので、情報源が明確 •通常のAI（GPT など）は“情報は生成される”のに対し、Perplexity は実際のWeb情報を検索＋統合してくれる •調査にかかる時間が 1～2時間 → 数分に短縮 ➡ “調べ物の時間削減” で、企画・営業・経営のスピードが大幅に向上
2. 比較・要約・論点整理（多情報の統合に強い） •「この3社の違いを表でまとめて」 •「10個の記事を元に要点を抽出して」 •「このテーマを専門家視点・投資家視点で整理して」 •大量の資料・記事・論文のまとめ	•Perplexity は複数記事を横断して「比較・要約」するのが得意 •論点整理を自動でやってくれる（観点の抜け漏れが減る） •“まとめる作業”が全部外注できるため、読み込む時間を短縮 ➡ レポート作成・企画立案の前段階を劇的に効率化
3. 検索ベースの“根拠ある回答”を得たいとき •「この数字の出典は？」「何を根拠に言っている？」 •データの正確性を確認したいとき •“AIの幻覚”を避けたい問い合わせ •上司・経営層に提出する正確な資料作成	•リンク・引用が明示されるため、裏取りが容易 •通常のAIの弱点である“適当な回答（ハルシネーション）”が発生しにくい •信頼性が求められる情報（市場データ・統計・決算・政治・規制）に強い ➡ “根拠が必要なリサーチ”は Perplexity 一択
4. 専門領域の調査（技術・医療・学術・政策など） •テクノロジー／AI領域の深い調査 •学術論文の要点整理 •政策・法律の改定情報の収集 •医療・科学の一次文献ベースの調査	•論文検索・専門ブログ・海外メディアを横断し、最新の専門情報を統合してくれる •通常のAIは古いデータベースが混ざることがあるが、Perplexity はリアルタイム検索で精度が安定 ➡ 研究部門・技術部門・投資部門が最も恩恵を受ける
5. 効率的なアイデア出し・企画補助（根拠付きの発想） •新規事業のネタ探し •顧客業界の課題・トレンド分析 •競合が出している新サービスの収集 •企画書・提案書の素材集め	•Perplexity は「検索 × 要約 × 分析」を同時に行うため、“事実ベースのアイデア出し” ができる •単なる発想ではなく、裏付けのある情報を元にした企画が作れる •調査→情報整理→示唆出しの流れを一気通貫でこなせる ➡ 企画の質とスピードを一気に引き上げる

本資料の内容は作成基準日のものであり、将来予告なく変更されることがある。また、本資料は信頼できると判断した情報等をもとに作成しておりるが、正確性、完全性を保障するものではありません。